Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 74

投影法によるしつけ方法の分類の試み

北 川 歳 昭
（中国短期大学）

目　的

構成論が示唆するしつけ観では、しつけは、大人から子どもへの一方的な働きかけではなく、大人と子どもの間の相互作用のもとでの子ども自身の発達である。子どもの能動的な働きかけによる知識の構成がしつけの本質であるとすれば、親の役割は、子どもの内部に構成される知識の種類と子どもの発達の段階に応じて、子どもの知識の構成を援助し発達を支えることである。しつけの主役はあくまで子どもであり、大人はわき役にすぎない。

しつけの目標は、C.カミイやR.デブーズらが示唆するところによれば、自律であり、自律性の発達である。さらに、しつけ方法を、それが子どものどのような心理的経験をもたらし、どのような発達を促すかという観点から、認知的側面と情意的側面に分けて考えてみるなら、親からの情報的（informative、知識授与的）かつ内的統制的（internal-control、自己統制的、受容的）な働きかけが子どもの自律性の発達にとって最も望ましいと考えられる（図１）。これを構成的方法（construction）と呼ぼう。構成的方法は、子どもの自主性、意欲、興味を重んじ、子どもの情緒を受容するだけでなく、子どもとの相互尊重、相互信頼の人間関係のもとで、子どもの知識構成や脱中心化を促す親からの働きかけである。具体的には、構成的方法は、よく考えさせる、自分で確かめさせる、ヒントを与える、相手の観点に気付かせる、モデルを示す、子ども自身に判断させる、子ども同士の討論や協同を促す、社会慣習的な知識ならばそれを優しく教える、などである。

それに対し、教示的方法（instruction）と名付けられるしつけ方法は、親からの、情報的ではあっても外的統制的な働きかけである。つまり、子ども自身に考えさせたり試させたり判断させるのではなく、親が先回りして具体的解決策を教えたり、指示したりすることである。また、そこには、おだてたり、ほめたり、ごほうびで釣ったり、親への服従を懇願したり、といった、優しく穏やかではあるが、親が外から子どもを統制しようとする意図が含まれている。

さらに、構成的方法と対極にある強制的方法（coercion）は、知識の構成を援助する手がかりや機会を子どもに与えず、また、子ども自身の自主性や主体性を尊重することのない外的統制的な働きかけである。具体的には、行為と罰とが子どもの理解力で関係づけられない罰し方や叱り方をする、命令する、強い指示を与える、親の権威によって服従を強制する、脅す、感情的に訴える、厳しく叱責する、体罰などである。

また、放任的方法（non-interference）は、内的統制的ではあるが、非情報的なしつけ方法、つまり、子どもに対して押しつけることも必要な知識構成を促すこともしない働きかけである。子どもの情緒や意欲を受容し、自我を認め、主体性を重んじているように見えるが、それが親のあきらめだったり、手抜きだったり、無視や放ったらかしだったりすることもある。単なる事実の叙述や子どもの体験の追認をするだけで、子どもにとって問題の解決に必要なヒントや気づきにくい他者の観点を提供することにつながらなかったり、子どもに理解できない親の一人よがりの言動である。

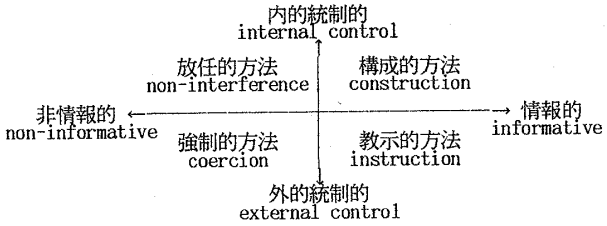

図１　構成論によるしつけ方法の４類型とその関係

図　1

本研究では、母親や保育者を対象に、具体的なしつけ場面での言葉かけについて自由回答を求めるという投影法的方法によって得られた資料の中から、特に「ウソ」の場面を取り上げ、４つのしつけ方法の分類法によって、回答の分析を行うとともに、しつけ方法のあり方について構成論の立場から考察を加える。

方　法

１）調査対象

Ｋ幼児クラブおよびＳ母子クラブ所属の母親４９名、Ｎ市幼稚園教諭３７名、某カウンセリング講座受講者６０名、計１４６名で、いずれも筆者の講演会の聴講者。年齢層は２０才代～５０才代で、構成論に関する知識はほとんどない。

２）調査票

投影法的調査票で、５歳の「真ちゃん」に対して、お母さんが何らかの言葉かけを必要としている８つの場面を絵と文章で示し、お母さんの言葉かけの内容を絵の中のフキダシの中に書き入れてもらう（図２）。多義性を避けるため、表情や衣服を省略するなど、絵はできるだけ単純化した。場面１～場面７は省略。場面８の文章「真ちゃんが花ビンを割ってしまいました。お母さんはそれを見ていたのですが、真ちゃんは『知らない』と言いました。お母さんは、真ちゃんに何と言っているのでしょう。」である。

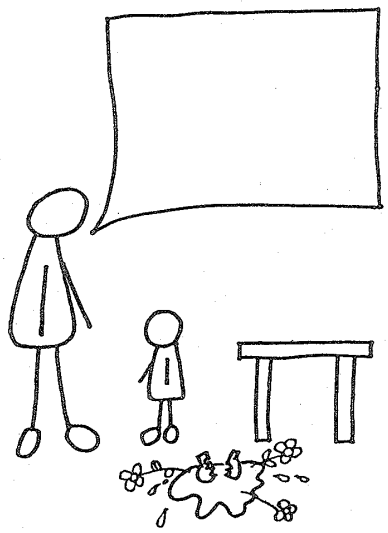

図２　場面８の絵図（一部）

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

結　果

1）質的分析

上記の基準に基づき、各回答を４つのしつけ方法に分類したが、その際、表１に示すような下位カテゴリーが見いだされた。

表１　しつけ方法の分類の下位カテゴリーとその具体例

＜構成的方法＞
C1 疑念の表明「どうして落ちたのかな」「真ちゃんのお口もまがっているみたい、おかしいなぁ」
C2 親の側の真実の告白ないし表明「真ちゃんがこわしたのをお母さんは見てたのよ」
C3 親の気持ちの率直な表明「本当のこと言って欲しかったな」
C4 ケガの心配「ケガはなかった？」
C5 間接的な真実告白への励まし「お母さんの目を見てごらん」「神様はちゃんと見ているよ」「ウソついたらいい気持ちしないでしょ」
＜教示的方法＞
I1 謝罪法の教示ないし指示「ごめんなさいって言って欲しいな」「こわれた時はあやまらなきゃね」
I2 片付け方法の教示ないし指示「花ビンをいっしょに片づけてちょうだい」「かたづけようね」「ぞうきんでふきなさい」
I3 注意の喚起「これからは気をつけようね」
I4 告白の指示「正直に言おうね」
＜強制的方法＞
E1 ウソの指摘と否定「うそを言ってはいけません」「うそをついてはだめよ」
E2 ウソつきへの人格的否定「ごめんなさいが言えないとみんなと遊べないよ」「ウソをつく子は嫌いじゃ」
E3 謝罪の強制「ゴメンナサイといわなきゃだめよ！」
E4 脅し「ウソついたら怒るわよ。本当のこといったらお母さん怒らないよ」
E5 告白の追及・追いつめる「本当のことをいいなさい」「どうして知らないというの」
＜放任的方法＞
N1 子どもの体験の追認「あーあ、やっちゃった」
N2 子どもの情緒の受容「びっくりしたね」
N3 過失の受容「あやまちはあるのよ」「花ビンを割ったことはしかたがない」
N4 擬人的表現「あーあ、花ビンが泣いてる」「花ビンさんかわいそう」
N5 事実の叙述「花ビンが割れちゃったね」

2）量的分析

一人の回答には複数のメッセージが含まれていたので、延べ件数を集計した（表２）。

①全体の傾向：構成的方法（36%）がもっとも多く、強制的方法（23%）、教示的方法（21%）が続き、放任的方法（20%）が最も少ない。

②群差：相対的に、構成的方法が多いのは教諭群であり、母親群は強制的方法が、受講者群には放任的方法が多い傾向がある。なお、母親群と受講者群の間には５％レベルで有意な差がある（$\chi^2=9.275, df=3, p<.05$）。

表２　各群の回答の分類（延べ件数と％）

	構成的方法	教示的方法	強制的方法	放任的方法	合　計
母親群 (N=49)	40 34.8	21 18.3	37 32.2	17 14.8	115 100%
教諭群 (N=37)	34 41.0	16 19.3	16 19.3	17 20.5	83 100%
受講者群 (N=60)	37 34.3	26 24.1	18 16.7	27 25.0	108 100%
合　計 (N=146)	111 36.3	63 20.6	71 23.2	61 19.9	306 100%

考　察

1）自由記述を下位カテゴリーに分け、さらに、それを４つのしつけ方法の類型にわける作業は、想像以上に困難であった。その理由の１つは、用いられたウソの場面設定に含まれる要素が、①過失、②ウソ、③ケガ、④片付け、と複数あったことである。絵ばかりでなく、場面設定そのものをさらに単純化する工夫が必要であろう。

2）子どものウソに対する構成的方法の基本的対処法としては、①ウソが信頼関係を損なうことに気づかせる、②相互信頼の関係が結局のところ自分にとっても都合がいいことに気づかせる、③自発的な真実の表明が信頼関係をさらに深めることに気づかせる、④ウソをつかざるを得なかった子どもの情緒的混乱や葛藤を受容し解決するよう励まし必要に応じて援助する、⑤身体や事物の損傷に対する子どもの心配を受容し解消するよう援助する、などが考えられる。しつけの内容領域の中でもモラルの領域に入る「ウソ」の対処には構成的な方法が最も求められるが、教諭群がそのことに気づき、熟慮した応答をしていることがうかがえる。カウンセリングを学んでいる受講者群は、非指示的カウンセリングを心がけているためか、放任的方法による回答が多くなっているのが注目される。

3）擬人的表現が幼稚園教諭に多い傾向があるが、擬人的表現は、子どもにとってどのような心理的経験をもたらすのであろうか。今回は、擬人的表現を放任的方法の下位カテゴリーとして分類したが、さらに検討が必要である。

4）下位カテゴリーについては、今回の分類の仕方以外にも別な分類がありうる。また、複数のメッセージがある時には、その組み合わせや順序によって、回答全体のニュアンスが変化することもある。下位カテゴリーのしつけ方法の４類型への振り分け方を含め、本研究は、まだ、試案の段階であることを断っておきたいと思う。

5）最後に、以上のような親のしつけ方法の分類の枠組を提案することには、どのような意義があるか考察する。

第一に、このしつけ方法の枠組は、親の養育態度や親子観の人間関係のあり方についての指針を与えるであろう。子どもの心理的経験から遡行して大人のしつけ方法を考察したこの枠組は、親の養育態度と子どもの行動（パーソナリティ）とを論理的に関係づけることができる。また、それは、養育態度の分類に関するサイモンズの図式を超えることにつながる。つまり、サイモンズの図式は、子どもに何らかの問題行動が生じた場合、それを親の極端な養育態度から説明することには有効だが、親が正反対の養育態度（例えば、過干渉と放任）であってもなぜそれらが同様に子どもの問題行動を引き起こすかを説明できない。また、何よりも、普通の、つまり問題のない親子に対して望ましい養育態度や親子関係を示す指針になりにくい限界がある。上記の枠組が示唆するところでは、構成的方法は子どもの自律性を強化することにつながるが、教示的方法、強制的方法、放任的方法はいずれも子どもの他律性を強化し、しつけや親子関係を阻害すると考えられる。

第二に、しつけ方法の枠組は、保育者の言葉かけに関する評価の判断基準となるであろう。保育研究においては、常に、子どもに対する保育者の言葉かけのタイミングとその内容が問題になるが、その言葉かけがその場面でふさわしいかどうかの判断には何らかの基準が必要である。親のしつけ方法の研究は、保育者や保育学生の保育方法における言葉かけの研究に応用できると考えられる。

参考文献

C.カミイ、R.デブリーズ（稲垣佳世子　訳）1980　ピアジェ理論と幼児教育　チャイルド本社
R.デブリーズ、L.コールバーグ（加藤泰彦　監訳）　1992　ピアジェ理論と幼児教育の実践　北大路書房
北川歳昭　1993　「ほめる・叱る」で、しつけはできるのか――構成論の立場からしつけを考える――　児童心理　臨時増刊６０１　金子書房

NII-Electronic Library Service